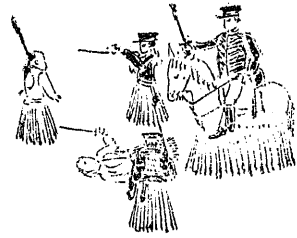


お伽童話

鈍太郎



とよ子

昔々。或大戦が、おしまいになつた時に。多くの兵士達は皆家へ歸ることを許されて、夫々お給金やらお褒美やら戴きました。其中に鈍太郎と云ふ一人の兵士は一包の軍用パンと一錢銅貨四つとを貰つて自分の故郷に歸ることになりました。

此鈍太郎は家にお父さんが居るでもお母さんが居るでもなく、全くの一人暮しでありましたので別段故郷に歸つた處で面白いこともありませんから寧ろのこと世界中を廻はつて方々を見物しようと云

ふ氣になつて足の向ふに任せて先づ東の方へと出掛けて参りました。一包の軍用パンと大枚四錢のお錢で世界中が廻はれませうか誠にあぶないものですが鈍太郎にはそんなことは一寸もわかりませんでした。何にしる、呑氣な人で、そして足の達者な性でしたから、足に任せてすたくと東の方のみ指して彼是五六里も來たらうと思ふ頃、とある野原へと出ました。折柄春の始めのことで、蓮花やたんぽぽがあちこちに咲き亂れて空には奇麗な鳥が春の歌を唱つて居りました。鈍太郎は道傍の木に根に腰打掛けて麗かな春の景色に見とれて居りますと頓がて後から

「若し、兵士さん。〜」と呼ぶものがあります。何用かと思つて振りかへつて見れば、見ると穢らしい一人の乞食が腰を屈めて

「若し、兵士さん、私は昨日からまだお飯も食へません、何うぞ何でも宜しう御座いますから御恵み下さいまし」と申しました。

根がお人好しの鈍太郎は早速承知して

「それは、御氣の毒なことだ。困るときは誰

も同じことだから、それぢや是でも食べなさい。そして茲に四錢あるから此中の一錢をお前に上げやう」と云つて軍用パン一つと一錢銅貨一つとを遣りました。頓がて茲を出立して一二里ばかりも來たかと思ふ頃向ふから又一人の乞食が参りました。そして

「若し、兵士さん、私は昨日からお飯も戴きません、何うぞ何でも宜しう御座いますからお恵み下さいまし。」と云ひました。鈍太郎はまた先つきの様に

「それは、御氣の毒なことだ。困るときは誰も同じことだから、それぢや是でも食べなさい。そして茲に三錢あるから此中の一錢を上げやう」と云つてパンと一錢銅貨一つとを遣りました。乞食は

「有難う御座います。御蔭様で生命が援かります！」と云つて何處かへ行つてしまつたと思ふと、また向ふから一人の乞食がやつて参りました。そして前の通りに

「若し、兵士さん、私は昨日からまだ御飯

も戴きません。何うぞ、何んでも宜しう御座いますから、御恵み下さいまし。」と申ました。

鈍太郎は別段いやな顔もせず、例の通りの調子で「それは、御氣の毒なことだ。困るときは誰も同じことだから、それぢやこれでもお食べなさい。そして茲に二錢あるから、此中の一錢を上げやう」と云つてまたパンと一錢とを遣つてしまひました。残る所は軍用パン一つと銅貨一錢があるさうです。

鈍太郎は道傍の石の上に腰を掛けて残つたパンを噛ちりながら、

「さて今夜は何處へ宿まろうか」と考へて居ります。後から

「ヤ、君は何處へ行んだい。」と云ふものがあり、誰かしらと思つて振り返つて見ると、矢張自分と同じ様な服装をした同じ兵士さんの一人でありました。

「ヤ、是はい、道連が出来た。僕は是から世界中を旅して歩うと思ふのだが君も行ないか？」と云ふと

兵「それは面白いな、けれど僕は用があるから一所には行かれないよ。けれど今夜は同じ宿屋へ宿まらう。そして手柄話でもしようではないか」と云ひますので鈍太郎も承知して、とある村はづれの小さな宿屋に止まりました。ところが鈍太郎は何にも彼にも銅貨一錢切りありませんので御飯も何も食べられませんでしたので困つて居りますと、も一人の兵士は懐から軍用パン三つと銅貨を三錢出して是で兎も角も夕飯を濟して仕舞ました。其晩は始めての旅で大分疲れましたから例もよりは少し早く床に入つて休みました。さて朝になつて鈍太郎は早く目を覺して首を上げて見ますと今一人の兵士は最う起きたと見えて床も何もありませんでした。

鈍「オヤ、大變早く起きたんだナア、夫れは然うと最う何時かしら？」と起上つて柱の上の時計を見ると今丁度四時を打つた時です。宿屋ではまだ下女も誰も起きては居ない様です。夫れにしては今一人の兵士は何うしたのだらうと鈍太郎は起きて其處等見廻はしますと机の上一枚の紙切が

ありました。何だらうと手に取つて見ると紙には鉛筆で左の如く書いてありました。

「心好き鈍太郎よ。三個の軍用パンと三錢の銅貨は返したるぞ。乞食より」と書いてありました。鈍太郎は驚いて、さては昨日の乞食は實は、皆乞食ではなくて神様の御使であつたのかと始めて気が付きました。

さて夜も明けましたので鈍太郎は此宿屋を出立してますく東の方へと志して歩いて來ました。すると向ふから一人の百姓男が車に山の様に荷を積んで來ましたが頓がて道悪の中へ引き込んでしまつて何うしても出られせん。鈍太郎は之を見て急いで行つて一生懸命に後押をして漸くのことので道の善い所に押し出しました。百姓男は大層悦んで二錢銅貨一つを呉れました。鈍太郎は之を持つて町へ行つて宿屋へ宿まらうと思つて急いで參りますと自分よりは少し先に一人の老人が見も弱げに杖ついて行くのがありました。鈍太は話し相手になる積りで早足で後から途ひついて

鈍「若し、お老人！何方へ御出掛けで御座い

「ますか？」と尋ねますと

「コレハ、兵士さん、私は是から世界中を見物して歩かうと思ふのだが、お前さんは何處へ行くのかね」

「私も實は是から世界中見物して歩かうと思ふのです」と此處で相談が極まつて是から二人一所に行くことになりました。頓がて町に出ましたので或小さな宿屋へ宿まつて一錢で御飯を買ひ一錢で御菜を買つて二人で食べました。

さて翌日は鈍太郎は一文もお錢を持つて居ません所が老人も生憎すつかりお錢を費つてしまつた所なので二人とも今夜は宿屋へ宿ることが出来ません。鈍太郎は心配してそつと

「お祖父さん、私はもうお錢がないから今夜は宿屋へは宿まれないよ」と云ひますとお老爺さんは平氣なもので

「ナニ、心配することは無いよ、私は少し醫者の眞似が出来からね、これで方々へ宿めて貰ふことにしようよ。」と云ひながらだん／＼と東の方へ來ますと或村はづれの百姓家の中から頻り

に子供の泣き聲がします。鈍太郎は何事かと思ふて門口から窺ひますと一人の子供が今しも床の上に臥て居て何か大層苦んで居る様子です。鈍太郎は急に思ひ付いたとあるものでつと家の中へ入つて「若しく、お女房さん大層子供が苦んで居るではないか、私の道連のお老爺さんはお醫者さんだが頼のんで上げ様か」と云ひますとお女房さんは大悦びで

「それは、有難う御座います。夫れでは何うか宜しく願ひます」と申しますのでお老爺さんは家の中に入り子供の脈を探つたり舌を見たりして頓がて持つて居た小さな鞆の中から何だか白い粉薬を少しばかり出して飲ませました。スルト見て居る中に今迄苦しんで居た子供の病氣はけろりと治つてしまひましたので家中の人は大變に喜んで今夜は是非此家に御宿り下さいと云ふので仕合せよしと二人は此家に宿ることに致しました。さて翌日の朝になつて二人は此家を出掛け様と云ふ時此家の主人は、何か御禮の印に差上げたいと云ひましたが無欲な老人は何も求ませんでした。

主人「それでは甚はだ輕少なものです。小羊を一匹差上げますから之れは是非御連れ下さいまし」と云つて奇麗な眞白な小羊を一匹呉れました。老人はいらないと云つて受けませんでした。鈍太は、「夫れでは私がついて行かうと云つて懐から細繩を出して小羊の首に縛つて連れ出しました。斯うしてだん／＼東へ／＼と歩いて来ました所が此日は何う道に迷つたものか行けば行く程山深く行く様な處ばかりで一寸も人里らしい所に來られませんかでした。二人は仕方がありませんから、ある岩かげの處に木の葉を集めて寢床を造しらへ木の枝を集めて焚き火をして此火で小羊の御料理をしてお甘しい焼肉の御馳走になりました。が不思議なことには老人は一口も肉を食べませんでした。そして鈍太の食べて居る間は其處等をぶら／＼と散歩して居りました。

二人が木の葉の寢床の中から眼を覺した頃は太陽は高く輝いて小鳥はあちこちに囀り春の花は時を得顔に赤や青や黄や白や色々の花を咲かせて居りました。

二人は大急ぎで仕度して又も東の方へと旅立ちました。だん／＼行くと今度は或王様の都へと來ました。スルト向くの道角に大勢人立がして何か事のある様子ですから二人は急いで行つて見ますと其處には王様の御令布が貼り出してあるのです。何事かと思ふて讀んで見ると此王様の大事なお姫様が今大層な重い病氣に掛つて居て今にも死にそうなのだそうです。夫れで誰れでも此お姫様の病氣を治すものがあるなら大急ぎで御殿迄來い。褒美は何でも望のものを遣ると云ふことでした。

鈍太は小躍して悦んでお老爺さんを急がせて王様の御殿へ行くことにしました。ところが此老人は足が弱いので中々歩けません。急がせれば急がす程何だか悠々と歩いて居る様で、僅か十丁か廿丁の道を行くのにも何でも四五時間ばかり掛りました。鈍太は氣が氣ではなく若しも御殿に行き着かない中にお姫様が死んで仕舞つては大變だからと頻りに「急いで／＼と申しました。が老人は一向平氣で「死んだつて、いゝぢやあないか」と云ふ調子で悠々としたものでした。頓がて王様の御殿に迄來

ましたので鈍太は急いで此事を御家來に申上げる
と御家來は惜しいことをしたと云ふ様な顔付で

「もう用はないよ、お姫様は今しがた御崩れに

なつたから」と云ふので鈍太はがつかりして、

鈍「夫れだから云はないこつちやない。人が急い

で〜と云ふのにさつぱり平氣で歩いて居るも

のだから間に合はなかつた。お蔭で今夜は立派

な御殿に宿まれる所であつたのに宿りそこなつ

て仕舞つた」と頻りにぶう〜云ひましたが老

人は相變らず平氣の平左右衛門で一向何とも思つ

て居ない様です。そして

老「い、ぢやないか、死んだつて、私は死んだも

のを生かすことも出来るよ」

之を聞いた鈍太はわはて、

鈍「エ？何？お老爺さん、死んだものも生かすこ

とが出来るつて！そんならそうと始めからそう

云へば何もやちも急ぐのぢやなかつたつて

そこで御家來から此事を王様に申上げると早速御

呼出しになつて直に死んだお姫様の處へ案内され

ました。

老人は室の戸を閉め切つて先づ釜に湯を沸かして
此湯でお姫様の身体をよく拭いて、それから懐か

ら大きなナイフを出してお姫様の首と手と足と胴

とを皆別々に切り離して仕舞つて、頓がて之を皆

釜の中へ入れて煮て仕舞ひました。ヌツカリ煮上

つて骨ばかりになつた頃に釜から出して之を机の

上に順よく並べて、

老「サアもう宜しい、立て！」

と云ひますと今迄骨計りの者がむく〜と動くか

と思ふと元の通りなお姫様になつて仕舞ました。

王様は大層お悦びになつて色々の御馳走をなされ

て幾日かの間は御殿の中に宿まつて居て方々、町

の中を見物して歩くことの出来る様にして下さい

ました。

一週間はかちの中、町の中も大体見て仕舞ひまし

たので二人は王様にお暇をして又も東の方へ旅立

つことに致しました。王様は夫れぢや何か褒美を

遣るから望のものを云へと仰せられましたが老人

は相變らず何も入りませんと云つて何も採りませ

ん。鈍太ははつと袖を引いて

鈍「おぢいさん、く、何だね何時もく慾のないつてさ、斯う云ふ時に何か貰はなければ宿屋へ宿るにも困るぢやないか」

と云ひました。老人は首を振つて居て少しも貰うとしませぬ。王様は此有様を見て

王「コン、道連の兵士其方は何かほしいと見える。何が欲しいか云ふて見い。思ふものを探

らすぞ」と仰せられました。鈍太郎は早速大悦びでお金が欲しいと云ふことを申上げますと頓が

て王様の仰せで家來が金貨を澤山、鈍太郎の前に持つて來ました。鈍太郎は之をランドセルは勿論のことポケットでも風呂敷でも袋でも凡そ穴

ある所へは詰められる丈詰込んでしまいました。門の外へ出てからも鈍太郎は嬉しくて堪らないので、時々ポケットから一つ二つ出しては眺めな

がらにこくして居りました。そして

鈍「お老爺様、お前様も随分馬鹿な人だね、王様が御褒美にわざく、斯う云ふ者を呉れると云ふのに入らないなんて！」と云つてふと横を見

ると今が今迄一所に歩いて居た老人が見せせん。

「オヤ老人は何うしたらう」と振り歸へつて見ても見せせん。まさか道を間違へた譯でもあるまい

がと方々探しましたが、何うしても知れせせん。仕方がありませんから鈍太郎は是から一人であち

らこちらとお金のあるに任かせて方々を見物してとある町はづれに來た頃にはあれ程澤山なお金も

最早あらかたなくなつて仕舞つた所でした。

町に入つて見ると、何處の家でも笑ひ聲は聞えず唱歌の聲も聞えずシンリ閑として火の消えた後の

様です。そして家毎には國旗の先きに黒い切をつけて出してありました。鈍太郎は何の事かサツ

バリわかりませんが併し唯事ではないと思ひましたので向ふから來た人に聞いて見ると是は昨日此

國の王様の皇子が死なれた爲めだと云ふことがわかりました。鈍太郎は

「占めた。是はい、處へ來た」と手を打つて早速

王様の御殿へ行つて「私は死んだ人を蘇かへらすことが出來ます」と申上げると王様は豫て噂に聞いて居た兵士の道連に相違ないと早速御殿の中へ呼入れて直に其術を

遣らせることになりました。そこで鈍太郎は大釜と水を持って來させて置いて、皆室の外に逐ひ遣り、そして前に老人の爲た通りに先づ御湯で皇子の身體を清めて、それからジャックナイフで皇子の首と胴と手と足を切り離して釜の中へ入れてクツクツと煮て仕舞ました。惜しスツカリ煮上りましたので首を釜から出して机の上に並べて頓がて、「サア最う宜しい、立て」と云ひましたが骨は一向動きさうにもしないので何時迄たつても何の變りもありません。鈍太郎はむきになつて「サア最う宜しい、立て」と繰り返しましたが矢張だめでした。星はいけない。飛んでもないことになつてしまつた。何うしたら宜からう。是が王様に知れたら自分は定めし殺されてしまふに違ひない。さて困つた事になつたと鈍太郎は青くなつて振へて居りますと。先きの程鍵を掛けて置いた室の戸を開けて入つて來たものがあり、見ると先達で道ではぐれたお老爺さんです。鈍太郎は思はず飛び出して、「お老爺さん、飛んでもないことをして仕舞つ

た。何うか御生だから援けて下さい」と云ふと「よし、そんなことだらうと思つたから今援に來たのぢや。是からはもうこんな眞似をしてはいけないぞ。是は人間のする事ではない」と云ひながら机の上の骨の順を並べ換て、そして「サア最う宜しい、立て」と云ふかと思ふと骨はむくむくと動いて若い皇子は元の通りの身體になり、そして老人はふいと消えて何處かへ行つて仕舞ひました。

王様は大層御悦びなされて何でも望みのものを御褒美に遣らうと仰せられました。鈍太郎は此時始めて夢の覺めた様な心持になつて、最う餘り欲張るのを止めて、そして世界中を歩くのも止めたいと思ひましたから其事を王様に申上げると王様も感心して

王様では、是れからお前は一生御殿の中の御客様にして置く。行きたい所があるなら何時でも行かして遣らう。見たいものがあつたら何時でも見せて遣らう」と云ふことになりました。